

播種による山ウド栽培

今まで県内においては山ウドの栽培はほとんど行われておらず、最近になって自生しているものから株分けした栽培が始められたばかりの状態である。

株分けによる栽培法は、一番手っ取り早く確実な方法であるが、茎の採取と異なり根こそぎ掘り取ることから社会的に非難を受けやすく、加えて根株採取に多くの労力を要し、大量生産には不向きである。

そこで、昭和58年度から当所において播種による栽培法を検討してきたので、その概要をお知らせする。

1. 山ウドの品種

山ウドの品種には、北海道にある北方系のカラフトウド、本州中部の高山にあるミヤマウドの二つの変種があるが、そのほかは特に分類するような品種は無いといわれている。しかし、自生している場所が異なると発芽の時期、茎丈、葉の大きさなどが違い、同一場所のものでも青茎系と赤茎系があり、多くの系統があるように見受けられる。

2. 種子の採取と貯蔵

ヤマウドの種子の熟期は、気象条件や自生している環境条件によって大きな差があり、また、同じ株から出たものでも熟期が異なる。早いものは8月下旬頃から熟し始めるので、黒化したものから順次採取する。

採取した種子は、直ちに容器内で水洗いしながら果肉と種子を分離し、水選して沈んだ種子だけを取り出し、種子と同量程度の濡れ砂または湿った鋸屑と混ぜる。

混ぜ終わったら容器に入れ、更に容器をビニール袋に入れて空気が通う程度に軽く結び、冷蔵庫か土中に保管する。冷蔵庫に保管する場合は、乾燥しないよう注意し、乾いたら散水する。また、土中に埋蔵する場合は、ねずみの被害を防ぐよう措置し、深さは30~40cmとする。

3. 播種

(1) 播種床の作り方

底面に穴をあけて排水できるようにしたコン

テナか木箱を用いる。

まず下層に厚さ4cm前後洗い砂か山砂を入れ、その上層に水に浸した濡れた水苔を3cmくらいの厚さに敷き、更にその上層に厚さ3cm前後に洗い砂か山砂を入れて軽く押さえておく。(洗い砂の代わりに風化したB層土壌を用いてもよい。要は腐植の乏しいやせた土を用い絶対に施肥しないこと。)(図-1)

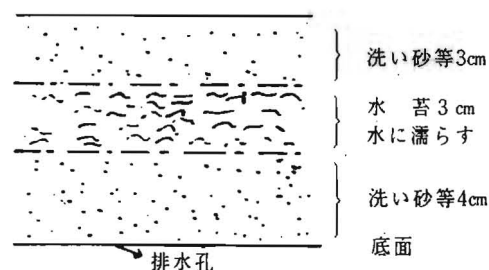


図-1 播種床断面図

(2) 播種時期

播種適期は、3月下旬から4月上旬くらいの間であるが、山ウドは霜に弱いので、降霜のおそれのなくなるまで、温室内(簡易なビニールのトンネル式でも可)で管理することが大切である。

(3) 播種方法

播種量は1㎡当たり5g前後とし、均一に床面に播種し床土に使用した砂等を種子隠れる程度に覆土する。均一に播種するには、かん詰の空きかんの底に釘で内側から数個穴を開け、これに播種床面積に相当する種子量を計量して入れ、ゆすりながら播種するとよい。また、覆土を均一にするには「ふるい」を用いると具合がよい。

(4) 播種後の管理

播種後は床土を乾かさないう時折噴霧器で散水する。また、温室内の温度は、15℃以上に上げないよう管理する

播種後10日~12日で発芽するが、発芽後も同様の管理を続ける。

4. 床替

(1) 第1回床替

発芽後40日前後経過したら床替を行う。

床土は普通耕作している畑土を用いる。この場合も播種床と同様ことさら施肥を行わない。また、

床替床は、播種と同じくコンテナ等を用いてもよいが、畑へ直接床作りしてよい。(図-2)

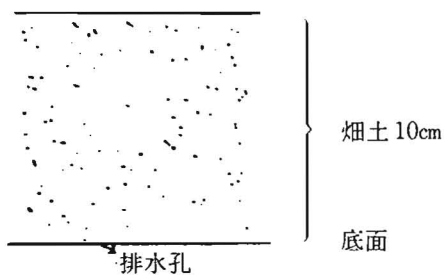


図-2 第1回床替床断面図

床が出来たら、十分湿めるように散水しておく。床替時の苗木の大きさは、苗長2cm前後で小さいため、小型のスプーンか竹べらを用いると能率的である。

床替間隔は3～5cm×3～5cm位が適当である。

床替後は遮光率70%程度のシェードで日除けを行う。晩霜のおそれのある時は、霜除けを必ず行う。

山ウドの播種床には立枯病が発生しやすく、薬剤を散布してもなかなか防除がむずかしい。当所の試験では、床替が最も効果的な防除法であった。

(2) 第2回床替

床替時期は6月中旬から7月上旬が適期で、この時期は入梅中で降雨が多いから散水の労も少なく、床替苗の活着を高めることができる。

床替の1か月位前に施肥を行い、土と切り混ぜておく。当所で行った施肥量を参考までに示すと1㎡当たり堆肥1kg、鶏糞200g、化成肥料(成分量N…14、P₂O₅…14、K₂O…14)65gである。

床替間隔は20cm×20cmくらいが適当で、床替後は水稻苗代用の割竹等でトンネルを作り、遮光率50%くらいのシェードで日除けを行う。

床替後のその他の管理作業としては、ヨトウムシ(カブラヤガの幼虫)の食害が多発するので、これを防除するため、苗木の活着を見届けたらスミチオン粉剤を10アール当たり9～12kg(3～4袋)床面に散布しておく。また生育期間中も時折見廻り、ヨトウムシの食害が発生しているときは、スミチオン粉剤と米ヌカを1:3の割合(容積比)で混合して水で練り、団子状にして床面に点々と配置して防除するとよい。病害は当所の試験では全く発生しなかった。

5. 種根の掘り取りと保管

10月末降霜と共に葉が枯れるので、土壌が凍結する以前に根株を掘り取り、大・中・小の3段階に選別し、土中30cmくらいの深さに埋蔵する。埋蔵の際は必ず防そ措置をする。方法は、周囲に防そ溝を掘り、溝内に殺そ剤や匂いの強い殺虫剤、廃油等を散布するか、金網を張り巡らして置くと効果的である。

当所の試験における規格別の根株収穫率は、大(25g以上)22%、中(8～25g未満)47%、小(8g以下)31%であった。

6. 定植

(1) 畑地栽培

2年目の春、晩霜のおそれの無くなった4月中旬頃定植を行う。

定植1か月くらい前に施肥を行う。当所で行った施肥量を参考までに示すと、10アール当たり堆肥2,000kg、菜種かす300kg、骨粉200kgを基肥とし、追肥に化成肥料(N…15、P₂O₅…15、K₂O…10)を100kg施した。

2年目は茎の収穫は行わず、8月に入って花穂の着生が認められたら、これを摘み取って根株の肥大化をはかる。

(2) 山地栽培

ア、植付け及び施肥

山ウドはあまり土地を選ばないが、極端に乾燥する所や低湿地は生育が悪く、粘土質や排水の悪い所は避けた方がよい。適地は中腹以下の北側斜面で、林内へ植付ける場合は明るい所を選ぶ。

施肥は行わないのが普通であるが、山ウドは施肥効果が顕著に現われるので、植付け1か月前に10アール当たり鶏糞100kg、化成肥料50kgくらいを植穴の位置に散布して切りまぜておくと更によい。

植え付け本数は10アール当たり2,000本(1㎡当たり2本)位が適当である。その他は畑地栽培に準ずる。

7. 定植後の管理

山ウドは定植2年目以降収穫できるが、同じ株から毎年収穫を続けていると、年々茎が細く小さくなって収量が減少してゆく。この対策としては、①1株に必ず1茎を残して採取する。②区域を2～3区分し、2～3年に1回採取する。③施肥を毎年行う。……などがあげられる。

8. 収 穫

山ウドは、現在流通している軟化栽培ウドと異なり、茎が20~30cm伸びた柔かい時期に、グリーンのまま収穫する。収穫の目安は、茎の地際の直径が2.5 cmぐらいの太さのものにおき、細いものは残すようにする。

収穫には先の細く尖った薄手の刃物を用い、根株のつけ根から切り取る。

収穫量は最盛期には10アール当たり1,000 kg前後が見込まれる。

以上は、茎を目的とする収穫であるが、新葉は天ぷら材料として最高である。新葉の先端の茶褐色を呈している部分を採取して利用するが、8月中旬頃まで順次採取できる。

9. 出 荷

採取した山ウドは、根元の土を洗い落とし、仕向先別の荷姿に包装して出荷する。

参考までに市場出荷の例を示すと、秋田県では

根元径2.5 cm以上のものを結束せず2 kgのダンボール箱詰めとしている。また、福島県では200 gを一束としてテープで束ねて出荷している。

山ウドの流通は、山菜加工場で加工して販売されるものが主体で、生食用は主として地方市場へ出荷され大都市の市場へはほとんど出荷されていない現状である。「昭和57年特用林産物需給表」によると、ウドが東京外9市場へ約5,367 t 出荷され、そのうち東京市場は3,322 t となっているが、これは軟化栽培ウドが大部分のようである。

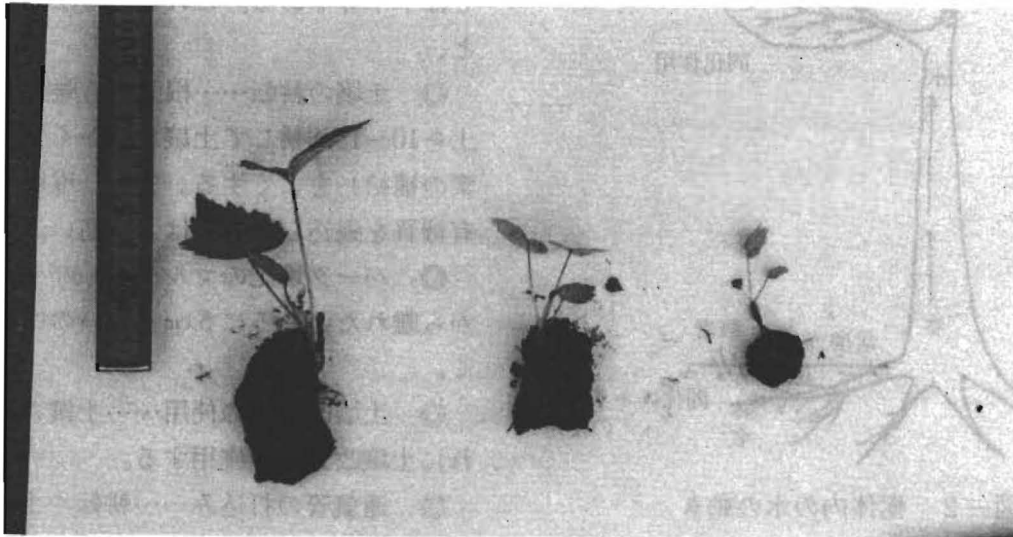
山ウドの価格は、加工用の場合も含め1 kg当たり200円~400円で取引きされている。

山ウドは風味が非常に勝れているので、食べ方をPRして生食用としての需要を拡大することが大切であろう。

参考文献 杉浦孝蔵 これからの山菜経営

大沢 章 山菜の栽培・加工・流通

経営部 篠原



第2回床替時の苗木

左から大(25g以上)、中(8~25g)、小(8g以下)